

賀来飛霞より山路屋への書翰(四)

西岡 昭

○

(二十二)八月廿二日之御手簡本月一日相達難有拜見仕候

時下残暑強御座候処御渾家御揃益御佳勝被成御座珍重之御儀

奉存候 次に南家始見々無異罷在候条乍憚御安意思召可被下

候 拘而熊治郎様至而御壮健に而御勉強に而私僑居へも不絶

御来訪被下候 就而ハ乍不及心付候儀者伏藏無ク申上候 御

同人御物入之事ハ昨年之入越被爲有候に付御仕送之辻も少々

嵩ミ候事と思考仕候 毎々申上候通里物價之騰貴も小給官員

生徒何レも困難に御座候 私身上に而申上候衆と兩人に而辛々

立行申候 是も衣類書籍等者少しも買ひ候事ハ出来不仕候

私ハ昔之書生之時同様極々辛抱のミ仕候間餘金無之次第に御

座候 月拾円に而者立行出来兼候 熊次郎様も今学文を御止

めに相成候而者小成にて後年者御爲如何と奉存候 今一層御

進歩に相成候者御自身之知識をも存分御廣メ御志も達し可

申候 尊祖父様にも兼々私へ仰候に者何卒子孫に学問をハ爲

致度卜之御事に御座候 幸御同人之御志も被爲有

○

候事故今暫之処御張込被成候方カと相考へ申候 昔と違ひ学

費成就之上ハ必ス世に被用候時節に御座候間篤と御高考之程

願敷奉存候

一 榮次郎も金三拾円拝借相願候趣に而早速御投与難有奉存

候 同人も月拾円に而渋々立行ハ仕候ものゝ書籍等者一品も

相求候事出来不仕 私も餘金無御座同人も順に参り候へ者来

年ノ冬卒業之期ニテ既に医者振り相成病客之診察等も仕候処

に相成特斗必用又書籍者成丈熟読仕候テ来年ノ試験相待不申

而ハ不計場合に御座候 以御蔭時斗ハ出来仕候書籍ハ近々相

求可申候

一 拙写之画も相違候山安心仕候 右者私多年心に掛り居候事に而御座候 私画学をハ少々進歩仕度相心掛罷在候 何分

日雇取之境涯に而閑暇無キに者少々込り申候

一 百花跡病院ト山静堂先生ト之ムクト素ハ何ニ方原因に御座候欵 先便御不平之様子ハ先生御紙面中に少々相見へ候

是が閑讀藏先生之談に強キモノト強キ者ト出合キハ何レ連も

強キ事が好キ故 余程中力善クナケレバナラヌに必ズ中違が

起ルトムクトハ東京にも流行随分新聞に者日々相見へ申候

一 竹園氏も職を辞候由何ノ事故に御座候欵向後之目的ハ如

何に候欵 早くより上京之才子方ハ何れも結構之

事に御座候 同人も中津に而警部を廢せられたる時直に上京

候ハ者何に欵取付可申に御面会候ハ者宣敷御伝可被下候 頭

君ハ如何にヤ矢張船乘に御座候欵船之事ハ違ひ申候 同断宣

敷お伝可被下候 先者御返事迄早々頓首拜

十四年九月二日 賀来飛霞

賀来惟弘様 御許

尚く候折角御自愛是祈候 おさん様へ宣敷油布院御便

之節博士大人へも宣敷お頼申上候

一 およき事も暫時下婢代りに呼上候可申欵と榮次郎とも

談し居申候

一 葛城 山田二先生へも宣敷御伝可被下候

一 南省吾先生へも御出合之節宣敷私も無事の段御伝可被下候

賀来惟弘様

御許

尚く候折角御自愛是祈候 おさん様へ宣敷油布院御便

之節博士大人へも宣敷お頼申上候

一 およき事も暫時下婢代りに呼上候可申欵と榮次郎とも

談し居申候

一 葛城 山田二先生へも宣敷御伝可被下候

一 南省吾先生へも御出合之節宣敷私も無事の段御伝可被下候

下也

御母上様へ者此封太り相成候間別にお返事差出申候 不悪

被仰上可被下候

(二十三)八月廿二日之御文今月一日にとゞき難有かたく拝

し上候べく候 お本世の如く残暑つよく御座候所あなた様御

者しせめ御揃愈御き介んよく入せられ御目出度そんし候べく

候 次に爰元にて南様お者じめ者どかりながら熊次郎様私

とも何れも無事にくらし候まゝ御あん志ん可被下候 熊次郎

様御事私方へもまいく御出下され何事も御ゑん里よ無く心

付候事ハ申上候 尚又私ぞんじよ里をも勝太郎様へも申上お

き候 なんぶん諸品の高直に付おもの入りふとくな里申候

③

御同人様之事に付てハあなた様よ本ど御志ん者いなされ候や
 ふ兼く御さつし申上候 御もつともの御事に御座候へども
 も者や熊次郎様にも御自分の御里ふけん御できなされ候ま
 御ふつがふの事もあるまじくとぞんじ候べく候 志かしなが
 ら遠方に御者なれなされ候 御氣遣ハ御もつともぞんじ候
 なるべくハあなた様少く御とふ里うの思召にて爰元へ御
 見物御ほやうかたく御出なされ候て御一所に一月にても御
 らんなされ候ハ者何もく御あん志んとぞんじ候 此事ハ熊
 次郎様ハ申におよ者す一郎平様にも毎く御者なし申候 御
 同人様方も志ごくよろしとお本せられ候 何とぞ御とふ里う
 に入らせられ候事よろしと山々ぞんじ候べく候 おつね様御
 もらひの事ハ私に而者志ごくおよろしき御事とぞんじ候べく
 候 志かしながら熊次郎様の思召うけ給りもふさずて南様へ
 御そふだんいたし候ても熊次郎様の所御ふ志よふちなれ者お
 志川様の所ハでき候ても者な者だふつがふゆへ先づ熊次郎様
 へ御そふだんいたし可申候

一 およき事ワがまゝものにて大きにく御せ王に相なり難
 有そんし上候べく候 同人事も志者らく下女が王りによひの
 ぼせ可申かともかんがへ居申候 志かしながらごくよろしき

つれなく候てハ女の事ゆへふつがふとぞんじ候 三次郎事も
 先日病氣にてきづかひ候へともよ本どころよろくなり申候て
 よろこび申候 熊次郎様まいく御たづ祢下されありがたく
 ぞんじ候べく候 たびのそらにても身にちかき人あるハよ本
 どうれしくぞんじ候

一 兼て御たのミ絵馬の画相とどきあん志ん仕候 右ハつ祢
 く心にかゝりおり候事に御座候 私も毎日く西にむき御
 宮をおがミ申候

一 熊次郎様御事ハ私心付候事をバ御ゑん里よなく申上なる
 たけむつまじく仕候まゝ御遣づかひ下されまじく候 前にも
 申上候ごとくどふぞく御とふ里うがけに御出にて御安心な
 ざる遍く候 先者御返事申上度あらく目出度かしく

(十四)九月二日

かく

ひか

賀来

おとふ様

まいる

かへす時候折角御用心可被成候 およ祢様へもよろしく御
 申上可被下候かしく

その後著うちたへて御ふきたいし申王けも無御座候 時
 分柄寒さつよく相なりまし候処其御地御そろひいよく御き
 げんよく入らせられおめでたくそんし上まいらせ候 爰もと
 にても熊次郎様南様次に私ともいつれもぶじにくらし候まゝ
 者どかりながら御あんもし下さる遍く候 拘而八月の頃ハあ
 なた様よ里の御文に熊次郎様へみなミおつ祢様をおもらひな
 され度との思召のよしお本せ下され私にてハ志ごくおよろし
 き御ゑんだんとそんじ候へども 熊次郎様のお保しめしをと
 くとうけたま^者りもふさず候てハ南様へ志きにも申上兼候まゝ
 熊次郎様いよく御けつ志んをうけたま^者り候事にててまど
 り申候 先達^者いよく御けつ志んに相なり候まゝ南様へも
 右のだん申上おき候 これもおつ祢様よこ者まへ御出のおる
 すゆへいまた南様の御返とふ者無御座候 いづれきんく御
 返事御座候事とぞんじ申候 熊次郎様にも来る一月に者八日
 ごろ御帰国とお本せられ候まゝいさい^者御同人様^が御聞とり
 可被下候 右の御そうだんもひまどり候へども私にてな本ざ
 りにいたし候王けにて者無御座候 いまた南様よ里御返事ハ
 御座なく候へどもいづれ御志ゆくだん^の事とそんし申候 先

ハあらく目出度かしく

十四年十二月廿九日 賀来

飛霞

賀来

おとふ様

まいる

かへすく志だいに寒く相な里まし候まゝ折角御用心可被
 成候

去年の秋別府にて御ワかれ申候事を

思ひ出てゝ

去年の秋者やみの者まに別れしも

者や一年をすぎに覺かな

およ祢様おさん様へもよろしく御伝へあげ可被下候

一 およき事もいづけ一月頃に者よろしきつれも御座候ハ
 者のほり候やふ相なり可申候 いつもながら御心ぞへ被下
 候様祢かひ上候べく候な里かしく

(二十五)

寒候 益御清勝可被成御座珍重之御儀奉存候 次に野生無

異儀罷在候条乍憚御安意思召可被下候 然者爾来者大に御無

音失敬之至に御座候へとも兼々御托し之御碑面出来不仕頓と

御用便を欠候処_レ御疎濶相成候次第に御座候 万々御仁怒可

被下候 最早東京者節季にて貧生大騒に御座候 野生輩も其

連中を不遁候 当地ハ何も蚊も新を貴候処に而実大節季然た

る事に御座候 拘而御碑面ハ漸々昨日出来仕候 熊次郎様来

一月八日頃より御発途に而鳥渡御帰郷と申に御決着に付右者

御托し申上候

一 去ル八月頃御母堂様_レ熊次郎へ南おつね様御もらひ被遊

度思召之由野生迄被御遣候処 野生に於テハ至極亘敷御縁談

と存候へとも熊次郎様之処承り不申候而ハ南氏へ御話申候訳

にも参り兼候間 御同人様之処を篤と承り先日南氏迄申込置

候委細_者御母堂様へ申上置候

一 当今都下酒老升三拾五銭白米金老円に付七升式合_レ五合

裏絹老端に付金六円諸品安價之物者 一品も無御座候 金貨ハ

勿論銀貨も只の一片も見掛ケ不申候 山之手と申伝通院辺_レ

北之方ハ家屋も過半取崩し今年や昨年にて大火之跡へ売里持

運ひ候処多し繁華之場所ハ益盛に相見へ申候 山之手も風呂

銭式錢_レ老銭五厘までに相成申候 下等社会ハ喰へナイく

之声喧し

一 且尾村之時枝軍平之長男太郎市徴兵に而小倉に居候処試

験に掛り八月上京 脚氣に而久敷不相勝野生を尋参り候付植

物園へ呼出し診察致候処容赫惡敷相見へ候間兩三日立ち其下

宿迄太田謙吾繁次郎兩人遣候 太郎市も大に喜ひ爾後礼状な

と参り其後絶而音信無之如何相成候事乎と存候 御序軍平へ

可然御伝へ可被下候

一 百花病家之景況如何年柄秋劣にてハ附金も如何と存候

一 南君ハ猪苗代開鑿に而先達朝廷_レ御賞典御戴尚又御昇等

重疊御上首尾に而此節ハ西京に近江之湖を引ク事に付西京府

_レ南様へ御見分を依頼候由に而一月中旬に者御越し之由に御

座候 御序御母堂様へも右之段被仰上可被下候

一 竹園ハ如何相成候欤如何様之事致候にや不評判と承り申

候 負債_レ起り候事なる遍し 是恒真楫氏ハ大藏省へ転任立

派之事に御座候 ドウデモ竹園_レ大分体裁亘敷相見へ申候

定而国東地方にて者評判も亘敷事と存候 先者乍延引御返事

申上度如此御座候 頓首拜

十二月廿日

賀来飛霞

尚々歳梢無餘候 折角御自重被仰歳可被下候 乍筆末御家
内様へ宣敷御申上可被下候 博水老先生にも大に御無音申
上候 御序宣敷申上可被下候 御同人様之油布院6大分へ
之通船之御工夫ハ如何相成申候乎

(二十六)

御無難御帰宅久々振りに而皆々様御喜悅と奉存候 尚又神
戸6之葉書早速相達し難有奉存候 御出立之前夜右者雨中に
て不得拝顔残念至に御座候へとも追々御紙面にて安心仕候
自今者旧之節季にて御多忙と奉存候 御紙上にて牛肉一斤代
十四銭と承り頻りに喰い度相成申候 駒籠者牛店一軒も無
之実に不自由之至りに御座候

一 徴兵免役料御上納之願書既に御差出し之由先ッ是に者安
心仕候

一 諄太郎氏ハ無滞帰京に相成申候 およき儀者三月頃宇佐
6女子之同伴有之由何レ其節ナルベキカ今日迄何之便も不承
候

一 貴君御進退ハ如何相成候方何れハ被仰候 應々御上京
ノ事ニヤ折角是迄学問上に而日月ヲ御立なされ候事中途に而
御廃しと申も如何 何分にも穩カニ御舎兄様と御熟談ノ上御
決し專一と奉存候也 草々頓首

一月四日

賀来熊次郎様 賀来飛霞

几下

(二十七)

新玉の年の初の御寿いづかたも同じ御事に祝ひ納めまいら
せ候 先以その御地ミなく様御揃いよく御きけんよく御
年むかへなされ候者んと数々御目出度そんし候べく候 次に
南様御者じめ私ともいつれもか至りなく加年いたし候まゝ者ど
かりながら御あんもじ可被下候 およ称様へも御年始の御祝
儀よろしく御申上可被下候

一 熊次郎様御事今日御出立に而御かへりに御座候 久かた
ぶ里御あいにて皆様御よろこびとそんし候べく候 拘而御同

人様御ゑんだ

んも相とんのひ申候 才ハ御同人様御聞きとり可被下候

今日者おつ祢様もよこ者まへ御出に相成熊次郎様と御同伴

相なり申候 是も南様さしづのよし今朝徳太郎様うけたま

王り申候 勝太郎様へもあらまし申上おき候 御すミ樽など

の事ハいかゞいたし候てよろしきや当時の事に御座候まゝ右

様之事も入り申ましきやいかゞ御相談申上候 何にもく春

深申のこし候べく候 あらゝめてたく かしく

十五年一月六日 賀来飛霞

賀来於とふ様

まひる

尚々寒気折角御厭なざる遍く候

(二十八)

者やぐ御年始の御状にあつか里あ里かたく拝しまひらせ
候 皆々様御揃御きけんよく御としむかへとうけ給て御目出

度そんしまいらせ候 さて先日ハ熊次郎様にも御滞りなく御

帰宅にて皆様御よろこびと御さつし申上候 南様へ御すミだ

るさし上申候事も南様先日ハ西京へ御出立相なり御立前ハ諸

事御いそがしきにつき御かへりのうへと御約そくいたしおき

申候 御帰のうへに者じきにさし出し可申候

一 熊次郎様御かくもん御やめなされ候と申候 おしき事に

御座候相なる遍くハ御やめなされぬやふとそんし候べく候

去ながら御同人様のおぼしめしもおあり可被成候 何卒ゆる

く御志ゆくだんのうへ御けつしよろしくと山々かんがへ申

候 なほ又南様の御かんがへもあらせられ候事とそんし候べ

く候

一 およきおまさいつれも大に御せ王に相なりありかたくそ

んし候べく候 な本此うへよろしく御たのミ申上候 およき

もしやの金吾とのぼり候へ者昨今者まひり候ころとそんし候

吉岡氏御申候に者三月に宇佐より里女子のつれ御座候よしい

つれそのせつにともそんし候

一 山蔵あきゆきとのも大そふなる志や金にてめい王くのよ

し右につきてもおかつとの志んぼふなされ 作もつにおいてい

れなどおぼながら家事のおせ王おできなざれ実にかん悲んの

事に御座候 御ついでのせつくれくよろしく御伝へ可被下候

一 東京も駒込ハ金考円に白米七升八九合に御座候 志よしなハ月々に祢だんたかくなりミなく大込りに御座候 ちよつと出候へ者すぐに壹円くらの金ハなくなり申候 熊次郎様の御雑用お入りなされ候も少しも御む里ハ御座なく候 先者御返事まであらく目出度かしく

二月五日 賀来飛霞

賀来於桃様

まひる

近日者餘寒きひしく候ま折角御用心なされ候様祢かひ候べく候 三次郎もよろしく申上候同人も熊次郎様御出を山々御待申居候 およ祢様おさん様へよろしく御申上可被下候な里

(二十九)

一月廿五日并に本月二日の御手簡難有拜見仕候 時下余寒

御満堂御揃益御機嫌克被爲入珍重之御儀奉存候 随而私ども無異儀罷存候 乍憚御放念可被成候 然者およき儀船中日数掛り候へとも無難に着京仕候而久々振対面安心仕候 同人出立に付候而も諸事御厄介に相成以御蔭東行出来仕候段難有奉存候 如貴翰本年ハ暖氣に而昨年之今頃とハ違ひ老骨も至極樂に御座候 熊次郎様にも猶今御進退之御決議も相分里不申候 御逗留之由御最なる御事に奉存候 私愚按には今少シ御学問被成候ハ者愈御上達に而宣敷と奉存候 何を申上ても当今ハ洋学無御座候而ハ人中に而一言も申出す訳に者至り不申候

一 岡松先生之書者当方にても南君之御説も有之候へとも先ツ急便に而其仮差上申候 石操斎も御老人様之御識り之人に御座候間宣敷と奉存候 山靜堂様之思召も被爲有ハ者御評議之上如何とも宣敷と相考へ申候 東京之名家御撰ひと相成候へ者三洲なる遍し熊次郎様既に其御説も御座候

一 山田氏先ツ居据之由至極可然と奉存候 私茅屋之義ハ空宅に致置候も可然人之居候ハ者大に宣敷御座候 何分宣敷御

頼申上候

一 時枝太郎市病氣快方相成出勤致候 御序親類之者へ御申聞可被下候 憲兵と申ハ随分立派之身形に而御座候 此状認中岡松先生入来に而先日南様ノ字ノ肉ヲ太メ書候様御申込に付認替候と而持参に御座候間最早期ニ後レ御間ニハ合申間敷候へとも送り差上者惟ト熊ノ間少シ離候に付切り縮可然と被申候

一 およきノ別紙差上候筈に候へとも愚筆に而間に合不申候依而私ノ御母堂にもおさん様にも呉々宣敷申上候様申出候

(十五)二月廿日

飛霞拝

惟弘様

尚々時候折角御用心可被成候也 乱筆御推読可被下候